

# 総括

飯島康之

## 1. はじめに

当日の論点整理等で議論したことと、本研究大会をオンラインで実施したこと全体に関することをまとめておきます。

## 2. 論点整理 1: オンライン授業のあり方

附属学校、大学、そして参加された公立学校のみなさまにおいて、かなりの「違い」があることを強く実感しました。まず、大学においては、「オンラインが当たり前」の中で、過ごしていましたし、今も過ごしていますし、新年度においても不可欠の存在です。形態としては、リアル対面授業、オンライン対面授業、それを混在させ学生が選択できるハイフレックス授業は、リアルタイムの双方向のやりとりを重視するものがあります。動画・資料などをサーバに用意し、いつでも学べる環境を提供するオンデマンド授業がその対極にあります。オンデマンド授業のための教材群は、本学ではまなびネットというクラウドシステムを中心に提供してきました。そこではアンケートなどの他、フォーラムなどをつくって議論をさせることもできますし、メールを使った双方向のやりとりやメーリングリストなどを使った連絡や議論なども行います。少なくとも学生はつながるための機器(PC)は最初からもっているし、メールアドレスや Microsoft Office なども含んだインフラはかなり整備されているところから出発し、自宅からアクセスするためのネットワーク環境などは個人差があるので、それに配慮しながらも、「実用的なシステム」として4月以降取り組んできました。

附属学校の場合、学校のネットワーク環境や機器はある程度揃っていましたが、たとえば、小中学校ではメールアドレスもないので、子どもあるいは保護者とのやりとりをするインフラがないところからの出発です。高校の場合は、ほぼ全員の生徒がスマホも持っているということと、数年前から Classi を導入していて、ネットワーク上でのやりとりをするためのインフラはある程度ありました。でも、大学生のように PC を全員もっているわけではありません。これらの差異によってそれぞれの取り組みは大きく変わったことを改めて実感しました。

附属学校ではそれぞれが何らかの取り組みが可能であったことと比較すると、公立学校の対応は難しかったと思います。教職大学院の院生の方々やいろいろな先生方からの情報で、そのことを実感することの多かった1年でした。プリントの配布、電話や FAX などを使った連絡などから変わることの難しさ。それは単に「先生方がやりたいと思ってもできない」ということだけではありません。「緊急自体において、それまでの規定や行動様式を変えて対処する」ための準備や手続き・実現のための方策などに大きな問題点があるということだと思います。

短期間の中で、必要があればオンラインでの授業に切り換えることができるノウハウを確立した名古屋中学校の試みや、YouTube などを活用しながら早い時期から学びの機会を

提供した附属高校の試みは評価に値すると思います。でも、公立学校は変わらない中で、そのノウハウを他校で生かすことがあまりできなかったのは、ある意味において残念なことでした。

「ある意味において」というのは、結果的に、一定の対策を伴いながらであれば、授業などは以前と同じようなやり方で実施しても、大きな感染は起きずにすんだという幸いであったということです。4月の時点において、ほとんどの公立小中学校にはGIGAスクール構想の端末が整備されます。より感染力の強い状況が生まれた場合には、対応可能なインフラを確保できることを意味します。

これまでのような感染力であれば、すべての学校を休校にしてオンライン授業に切り換えるほどではありません。それが一つの共通認識ではないでしょうか。しかし、たとえば、大学や大学院にとっては、オンラインを「生かす」ことは、これからの当たり前に変わりました。小中高校においても、非常事態にどう対応するかというだけでなく、普段の学びのあり方を変えうる選択肢を提供してくれるものとして、ICTを教育でどう生かしていくかの出発点に到達したのではないのでしょうか。

### 3. 論点整理2：作るべき / 利用すべきコンテンツと学びの支援のあり方

附属学校の多くは、独自のカリキュラムがあり、独自の教材があります。名古屋中学校では、Google Classroom の上に、既存の教材群を移植し、これまでのプリント中心のシステムを電子化する試みを進めているとのことですが、もともと独自の教材群が word や Excel のファイルなどの形で作られている学校では、そのような試みには注目する価値があると思います。移植するときは大変ですが、一度以降をしておけば、そのクラウドシステムを使って先生方が仕事をするのをテレワーク化することも可能になります。生徒が自宅からも学べる環境にもなります。確認テストの採点や学びの履歴の蓄積なども手作業から解放されることになります。

つまり、GIGA スクール構想によって「一人一台の端末」やネットワークは整備されることとなりますが、それが生きるのは、クラウド上のシステムが整備されることが不可欠で、そこはどの学校にとっても、次の大きな課題になると思います。

今回、いろいろな企業がフリーアクセスできるようにコンテンツを提供しました。愛知県は、県立学校の生徒はスタディサプリのコンテンツにアクセスできるようにしました。附属高校が使っていた Classi などでは、最初の段階で標準的な解説動画コンテンツもあります。有料にいずれ変わっていく中で、どういうコンテンツの利用を想定していくべきかという点も、一つの視点になっていくと思います。

一方、附属学校がされているように、先生方自身が独自の教材を作って提供することも大切です。子ども自身が作ったコンテンツを学びに生かしていくことも当然です。また、YouTube などにさまざまな解説動画コンテンツが作られていたり、web 上にさまざまなコンテンツが無料で公開されていることもたくさんあります。どういうものは、標準的なも

のを利用すればよく、どういうものはカスタマイズすべきなのか、どういうものは独自に開発すべきなのか、どこまで共有すべきのかなども今後の大切になっていくのではないのでしょうか。

#### 4. 論点整理 3: クラウドシステムと新しい利用の可能性について

今回、大学では、ICT 教育基盤センターによる「まなびネット」が大きな役割を果たしました。これは、Moodle というオープンソースの e ラーニングシステムを本学のスタッフが改良したものです。名古屋中学校は、Google Classroom を利用しました。また、附属高校では Classi を利用しました。今後 GIGA スクール構想の実現に伴って、それぞれの市町村あるいは県立高校によって、使うシステムが確定していくでしょうし、新しいシステムも開発されていくものと思います。

一方、今回青山先生から報告されたソフトバンクとの提携の中で利用している MovieLibrary は、また違った可能性を示してくれています。岡崎中学校の授業公開をオンラインで行ったり、大学の教育実習前の事前指導の中で、附属学校などの授業の様子を学ぶためのインフラとして利用しています。YouTube のように、教材動画を安定したサーバにアップした利用することが可能になるだけでなく、誰が使うかを想定し、特定の人だけがアクセスできます。教材動画だけでなく、研究授業の公開や、授業スキルの研修のための利用など、幅広い可能性があります。それは研修等を大学やセンターに集まって行うだけでなく、職場や家庭にいたままアクセスできる環境、つまり先生方の現職研修のオンライン化を進めていくためのインフラとして使える可能性も実感しました。

#### 5. オンラインの研究大会を終えて

率直に言って、当日のオンラインでの参加者は決して多くはありません。多くの方が参加していただけるようにするためには、課題もたくさんあります。でも、多くの手応えを感じました。これからの教育を考える上でのオンラインの可能性と重要性をまず実感しました。大学と附属学校のメンバーがつながって議論する機会は決して多くないので、それを可能にするオンラインの可能性も実感しました。公立学校のみなさまにとって、オンラインを使うことで、研修や研究などで本学を活用していただく可能性を広げていける可能性を実感しました。また一方で、実際にみなさんが集まって親交を深めるための「場所」としての本学キャンパスの魅力を再認識しております。授業と一緒に、オンラインだけでは実感できないこともたくさんあります。実際に集まってことできることを、今後の研究大会で仕掛けていきたいと、改めて思いました。

今後とも、よろしく願いいたします。